児童らの力で消滅可能性都市存続へ

第38回時事通信社「教育奨励賞」推薦校の実践⑧

●福井県高浜町立高浜小学校

美しいビーチの称号「ブルーフラッグ」を有する福井県の若狭和田海水浴場から車で5分。港町にある高浜町立高浜小学校（　　校長、児童数204人）は2020年度から、児童が地域の課題に対して、地元の団体や高校生などと連携しながら解決策を探る「地域とつながる探究的なふるさと学習」に取り組んでいる。

人口減少に悩む町の存続に向けて、5、6年生で組織する「コドモノ明日研究所（アスケン）」は、地域課題の調査や、解決につながる商品の開発を行う。活動を通じて、児童が「学校から与えられた問い」ではなく「自らが発見した問い」に取り組む機会を設け、主体性や課題への探究力の向上、ふるさとへの愛と誇りの育成を目指す。取り組みは4年目に入り、主体的な学びや意見の発信を行う児童が増加したほか、開発した商品の販売を通じて、地域に活力を与えている。

地域課題解決へ児童が提案

高浜町の人口は9780人（23年4月末）で、10年以上減少傾向が続いている。14年には、民間の「日本創成会議」により、40年までに消滅の恐れがある「消滅可能性都市」に該当すると指摘されるなど、町は人口流出や高齢化に悩む。

町の存続、発展に向け、高浜小では、子どもの目線で地域の未来のためにできることを考えて実行するコドモノ明日研究所を20年度に設立。6年生を中心に、地元有志のまちづくり団体「高濱明日研究所（アスケン）」と連携して活動し、地元住民らから寄せられた町の課題をテーマに、実態の調査、解決につながる商品の考案、発表、販売までを1年かけて行っている。販売した商品の収益は、すべて次年度以降の活動費用に充てられる。

1年目の20年度は、地元名産の高級ブドウ「若狭ふじ」の果汁が大量廃棄される問題がテーマ。児童たちは8グループに分かれ、食べられるのに捨てられる「食品ロス」を削減させ、町の特産品のPRもできる商品の開発に向け、ブドウを使ったアイスや香り付きキーホルダーなどの商品アイデアを企画。各グループが全校児童や教職員、保護者、地元住民らの前でアイデアのプレゼンテーションを行い、投票で選ばれた「ゼリータルト」を地元の洋菓子店の協力を経て商品化し、年度末に町内で販売を開始した。

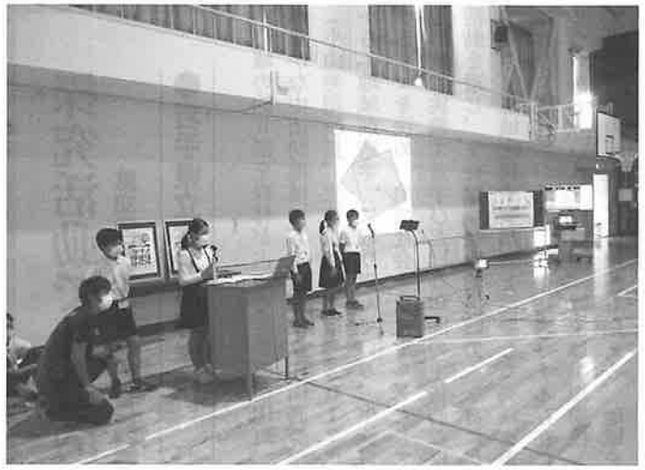
児童に提案する地域課題については「小学生にも理解しやすいもので、何か商品を作って解決につなげられそうなものを選んでいる」（アスケン共同代表　　）という。ただ、探究的な学習を実践する上で、取り組みを担当する教員らは、児童に情報を与え過ぎないことに注意している。教員やアスケンは、町の抱える課題やその原因、影響について説明するものの、解決策までは示さない。児童一人一人が、課題を解決する必要性や方法について自分なりの意見を持つことで、活動に対する意欲や熱量を高める狙いだ。

また、児童が課題について「それってどういうことですか？」「そのままにしておいていいのですか？」という疑問や興味を持ち始めた際に、さらに、学びを深めるための体験学習にも力を入れる。実際に問題に悩む当事者の話を聞き、映像や写真で現場の確認を行うなど、どこの誰が、どんな問題に悩んでいるのかを具体的に知る機会を設け、実用性の高い解決策の考案をサポートする。

21年度は、ムラサキウニの大量繁殖により、町のきれいな海の環境や生態系がむしばまれた問題を背景に、駆除したウニを活用して町をPRするため、当時の6年生がウニの殻を使ったランプ「UNIKARA（ウニランプ）」を企画、販売した。その際、児童たちは企画立案に向け、地元漁師から、海藻が集まって魚介類を育む「藻場」がムラサキウニによって食べ尽くされている事実や、毎年駆除する数万匹のウニの活用方法が見つかっていない現状を聞いた。

さらに、ウニの殻割り作業なども体験し、「殻割り作業めっちゃ大変」「思ったよりも身が少ないから、たくさんは使えないかも」といった発見を基に、ウニを使用したジュースやスナック、殻を使った置物など10個の商品を考案。前年度同様、保護者や地元住民などの投票から選ばれたウニランプは同年度末に町内のカプセル玩具の自動販売機で販売を開始した。

販売方法やパッケージのデザインなどを児童が考案したウニランプは、地元住民や観光で町を訪れた人に人気を集め、発売から1年間で500個を売り上げた。23年現在も売り切れ状態が続くなど、町内外の人々から親しまれる商品となった。学習成果の一つとして商品を販売したことは、地元のPRにつながっただけでなく「児童たちが、自分たちの探究してきた学びが社会的にも意味があると実感し、新たな活動への意欲を高める効果もあった」（　　校長）という。



企画した商品アイデアをプレゼンテーションする児童ら（高浜小提供）

ただ、教員らは取り組みの評価規準として、商品の完成度以上に児童たちの活動の「課程」に重点を置く。特に重視するのが「自分の思いや考えを表現し、発信する」ことだ。活動をグループ化し、地域の住民や団体と交流する機会を用意するなど、児童が自らの問題意識やアイデアを口に出して表現し、他者と協働しながら学習を進められるよう、授業をデザインした。

校外の人と協働した取り組みの一つとして、コドモノ明日研究所は、県立若狭高校の生徒と共に、国連が定めた「持続可能な開発目標」（SDGs）を町の課題に置き換えて取り組む「高小SDGs」を策定した。住みやすい町づくりや町の人口増加に向け、環境や産業、観光について八つの分野で目標を定め、取り組みが目指す方向を明確化した。

22年度には、5年生も参加し、ウニランプの改良に取り組んだほか、6年生と共に高小SDGsを全校児童に対して発表。地元団体や高校生など地域と交流しながら町の課題解決に取り組む姿勢を他学年にも伝え、地域課題の解決学習を全校に広げた。

町の独創的な課題解決組織に

同校は、年間50～60こまと、総合的な学習の時間の大半をコドモノ明日研究所の活動に充てている。しかし、1年間で商品の販売まで行うのは容易ではなく、例年、商品の完成、販売は年度末ぎりぎりになる。　　校長は、過去3年間、商品の販売まで行うことができた実績は「児童たちが活動に熱意を持ち、授業以外の時間に、家庭や地域で主体的に取り組みを行った結果」だと言う。

取り組みを主導した　　教諭は、活動を通じて「児童の積極性やICT（情報通信技術）機器を利用してアイデアをPRする力が成長した」と評価する。また、「町の課題は人ごとではないという意識と共に、地域と協力することで子どもでもできることがあるとの気付きが広がったことも大きな成果だ」と語る。

現在、コドモノ明日研究所の取り組みは、高浜小の児童にとって5、6年生になったら参加できる「楽しみ」で、町にとっては「地域の課題に対し、大人と違った独創的なアイデアで取り組む、課題解決組織のような存在」（　　さん）になっているという。

　　校長は「引き続き、活動の過程を大切にしながら、児童の自主的な学びを全力でサポートする。今後は、高小SDGsの目標達成と地域の課題解決に向けて、さらに活動の輪を広げていきたい」と話している。